

入りを警戒しての仕業であったが、酸味は乳酸であったのである。その後何回かこのような機会があり、鶏卵を貰ったり、更に子供に勉強を教えてくれ、などと頼まれたりした。しかしやがて農耕の季節も終り、二度とこのような機会はなかった。

一般ソ連人の気質の一端を味わったということ、今も思い出に残る話である。

## シベリア抑留

### 仕事も食事もパーセント

熊本県 椎葉常喜

聞き手 本日はお忙しい中を聞きとり調査のためにご協力いただきました、まことにありがとうございます。

終戦後、あなたはシベリアに強制抑留され、しかも、酷寒の地で重労働に従事させられて、引揚げてこられました。この労苦を、再びこのようなことが起こらな

いように、後世のために、ただいまからとくとお話をお願いしたいと思うわけでございますので、どうぞよろしく。それでは、どうぞ。

椎葉 私は椎葉でございます。ニュージトンにおいてソ連軍に対して無条件降伏し、そこから部隊一行はチチハルまで行軍しました。その間は、ソ連の兵隊に囲まれて、そしてチチハルに着いたのでございました。その間においては、戦争に負けたというような状況でございましたので、中国の方やら、それからソ連人の方やらに、大変、何と申しますか、恨まれるといえますか、そのような感じが、そのときはしてなりませんでした。そして、ようようたどり着きましたのが元關東軍の戦車部隊の訓練所と聞いておりましたが、その部隊に集結いたしましたので、それから、ソ連に作業に行く体制をとったのではないかと私は思っております。そのときに、シベリアに行くというようなことは全然思っておりませんでしたし、またソ連の兵隊さんたちも、そういうことは言ってもおりませんでした。そして、その元の戦車部隊においてシベリアに行く作業

班編成ができ、出発したのでございます。それが、朝、夜明けとともに、多分考えてみますれば、十時ぐらいではなかったかと思いました。

県道を、ソ連軍に守られて歩いていましたところ、休憩が入りまして、そのとき、私たちの小隊が、満鉄の住宅の前に休憩したようなわけでございました。すると、満鉄の社宅の方から子供たち、お母さん、ばあちゃんたち、男は余り見えなかったが見えられまして「こういう主人は知りませんか」と聞かれ、「いいえ、そんな人はわかりませんが」と。そのときに、奥さんたちが「もうどうしたらいいかわからない。自分たちも一緒に連れていってもらうことはできませんか」と。そのような話でございましたので、「私たちもどこに行くのか全然わからない。ただ、帰れるとか何とかいうような話もあるし、作業に行くという話もありましたが」そんなことを言って、それからそのときに、「こぎゃんしとりますけんど、晩になればジープが来て、そして中に入れられて、おなごはいないのか、食糧はないかと言って、もう必ず将校が巡検してくる」と。

聞き手 それでは、あなたは、武装解除後、どのような経路でシベリアに入られましたか、お話しください。

椎葉 チチハルにおいてソ連軍の汽車に乗って、それは有蓋車でございました。シベリアの鉄道といいますが、満鉄の鉄道よりも軌道が広くなっているというようなことでもございましたので、「そんな汽車はどきやんとだろうか」と言って、珍しく自分たちは乗りましたのが有蓋車でございました。それに揺られて出発いたしましたから約十二、三日間だったと思いますが、クラスノヤルスクに着きました。

聞き手 それから、どこの収容所に抑留されましたか。

椎葉 クラスノヤルスクの第五収容所と聞きました。聞き手 その収容所の作業はどんな作業でしたか、詳しくお知らせください。

椎葉 これは建設関係の仕事に行く班もあり、工場に行く班もあり、いろいろあったように思います。ただし、私たちは工場に連れていかれました。着いたと

ころは鋳物工場でございますして、そのときの話により  
ますと、コンバインといいますが、その機械の部品を  
つくっている工場だと聞かされて、私たちはその工場  
で働くようになったのでございます。毎日、寒いとき  
は、溶鉱炉の火がございまして、その溶鉱炉の火に  
暖まりながら、「ドワイ、ドワイ」と言われてみんなが  
働いて、パーセント食に尽くしたのでございますが、  
みんな素人でございますので、なかなか仕事がパーセ  
ントも上がらずに、そして、パーセント食に少々の食  
事をもらって食べて、仕事に慣れるまでは大変苦労し  
たというところでございます。これはやっぱり現場に  
当たった人でないとわからないという感じがいたしま  
す。

聞き手 それでは、あなたが収容されましたところ  
の収容所の食糧関係についてはいかがでしたか。詳し  
くお願いします。

椎葉 これは、工場で働いているときですが、食糧  
はパーセント食によって分配されておりました。パー  
セント食は校食、土食、兵食の三つに分けられていた

と私たちは思っております。工場から帰るとすぐに飯  
盒を持って黒パンとスープをもらって、スープなんか  
は缶詰の缶で量っていたらだいたいのように思っており  
ます。黒パンは、ちゃんと向こうの食堂の兵隊さんが  
来て渡してくれましたので、それをもらって、帰って  
食べていたようなわけでございます。

聞き手 それでは食糧の事情で、黒パンだったです  
か、コーリヤンだったですか、ジャガイモなんかいろ  
いろあったと思いますが、主として、主食は何だった  
でしょうか。

椎葉 主食はやっぱりスープとパンですね。パンが  
もうほとんど主食じゃないかと思っております。

聞き手 収容所内におけるところの民主教育につい  
ては、どういう教育を受けられましたか。

椎葉 作業から帰ってから食事が終わって、そのこ  
ろ、約三十分か一時間ぐらいだろうと思いますが、民  
主教育といって、いろいろな集会といいますが、話が  
あったように思います。そのときに私たちも、赤旗の  
歌、それから、それに匹敵したような歌を二、三覚え

て帰ってきております。

民主教育に関しては、結局、一生懸命やって、そして一日も早く日本に帰るといふ考えの人もあったように思われます。

聞き手 それでは、日本人同士のいざこざがあったということも聞いておりますが、あなたの収容所ではいかがだったでしょうか。

椎葉 それもいろいろありましたように思われます。食事の問題といえますと、必ずジャガイモ、そんなものを買ってきたか、もらってきたか知らんが、そんなものを持ってきて、炊いて、おいしそうに食べているところを、それにみんながやあやあ言っていて、それを取って食ったり、けんかを始めたたりするようなことも再三あったように思われます。

聞き手 それでは、あなたが引き揚げ直前の向こうの食糧事情、または引き揚げて帰られてからのあなたの体のぐあい、調子、また就職においてどんなことがありましたか、お知らせください。

椎葉 食糧事情においては、やっぱりパーセント食

で、あくまでも帰るまでパーセント食でございますので、やっぱり思うように食べるものもないし、一日も早く帰ったら、みそ汁を煮て食うとか、白飯を炊いて食うとか、そんな話ばかりして帰ってきたようなわけでございます。

そして、帰るときには、ナホトカまでまたシベリアの鉄道に十何日間でございましたらう、揺られて、ナホトカの収容所に入りました。そして第一収容所に入ったとき、我々の環境問題について、いろいろとソ連側の方から調べられまして、それに合格して、第二収容所に移ったのでございます。

そして、第二収容所に入ったところが、今度は、先ほど申し上げました民主主義の教育の問題にどの程度日本人の方が占めておられるか、いろいろな話が行われまして、そのときに一、二の将校の方が、兵隊に対していろいろなことがございましたことを理由に上げるられました。これがソ連軍に対して、非常に功績がよいと言って褒められまして、そして第三収容所に送られました。第三収容所に入ったところが、も

う何も民主的ないろいろな教義とか問題に関しては一切話してはくれるなど言われて、検査官の前を通過して、第三収容所に入ったのでございます。ある人の話を聞きましたところ、「非常にこの部隊の方はよいところへやられました。だから、スムーズに第三収容所に入られて、本当によかったですね」と言われたようなことも聞いたようなわけでございます。

そして、そこに入って二、三日したところが、日本からの船が参りまして、それまでは何もしゃべらずにただ我が家に帰ったら、みそ汁を食べるとか、白飯を炊いて食べるとか、お茶を飲むとか、水を飲むとか言っていて、そして船が来るのを待っていたようなわけでございます。そうしたところ、船が入りまして、それから出発の命令が出、ソ連の兵隊さんたちがずうっと私たちを護衛して、船の波止場まで連れていって、船に乗せてくれたのでございます。

船に乗ったところが、日本の水兵さんではなくて、今思いますと、船に乗っている漁師の方だろうと思えます。それに乗って、いよいよ出航となりまして、沖

まではずうっと、ソ連の駆逐艦ですかしら、それに護衛されて沖まで出ていきましたところ、日の丸の旗が上がり、みそ汁が出て、「兵隊さん、ご苦労さんでございました」と言ってくれました。そのときの日の丸の旗を見て、涙ぐんで万歳を叫んだようなわけで、帰ってまいりました。

それから、舞鶴港に入りましたところ、舞鶴港は大きな船が入りませんので、沖から小さな船に乗って舞鶴の栈橋に入ったのでございますが、そのときは日本——私が今考えてみますと、そのころ看護婦さんだろうかと思いますが、たくさんのご婦人の方、または老人の方が、だれが帰っておらんだろうか、かれがおらんだろうかと言われて、また収容所に入って、そこで結局、着て持って帰った衣類その他いろいろなものを消毒してもらいまして、スカッとなった着物を着て、また日本の宿泊所に入ったようなわけでございます。それから、いろいろロシアにおったときの調査がありまして、どんなことだったろうかといって、いろいろ聞かれましたが、知っていたことはほとんどお話し

申し上げました。そして、復員列車が入って、それに乗って私たちは、昭和二十三年九月一日に入間駅に着いたわけでした。

(聞き手・小佐井)

## 「わが体験記」

鳥取県 井澤 博

敗戦の日から入ソまで

昭和二十年八月十五日、その日も普通と変わらぬ宮内勤務で一日が終わった。翌日の昼過ぎあわただしく集合させられた私たちは、人事係准尉から「敗戦」を知らされた。至極要領を得ぬ内容の話で、一回半信半疑だった。奉天の関東軍高射砲司令部の兵士として所属してこの日を迎えた。

これが武装解除ということだろうか。書類を焼き武器弾薬の集積作業に追われた。千人針の腹巻も破り捨てた。

九月二十日ごろ、奉天の北稜を出発した輸送列車は一路北進した。中隊長から「すれ違って南下している列車の民間人は、大連港から日本に帰る人々である。我々軍隊は黒河からウラジオストク經由で帰国する」と説明があった。列車にはスコップなどの土建工具や防寒服など沢山積み込めとの指示もあった。もちろん乾パンも背囊いっぱい詰め込んだ。(この時点では、何を意味していたのか知るすべもない)全員揃って家族の待っている日本の土を踏めるという安堵感で笑顔さえ車内にみなぎっていた。途中、国境の街「黒河」。大きな「黒龍江」の流れにも目を見張った。カラカラと回る水車の船で「ブラゴエシチェンスク」に渡った。金髪の子どもたちが駆け寄ってきて、「ドラウスチェ」と差し出す小さな手に異国シベリアを感じた。しかし、この時点でも捕虜という認識は全くなかった。

いよいよ運命の列車に乗り込んだ。有蓋貨車の上下二段に寝る組立式で、中央にダルマ型ストープが一基ある。とても寝返りなどできるような余裕はない。夜